

「アンジェイ・ワイダ」ノート

松島 浄

「世代」（一九五四年）

脚本・ボフダン・チェシユコ

人が小説家ではなく画家でもなく映画作家になるとはどういうことであろうか。

小説は言葉によつて人間のこまやかな心理描写ができるが映像表現に乏しい。また絵画はいい映像によつて一瞬の像を描き出すことができるが、人間関係の絡み合いまで描き出すことは難しい。そんな中で表現を模索した青年が映画作家になろうとしたのはなぜであろうか。それはその青年が若き日に体験した状況があまりにも過酷かつ衝撃的だったからではないかと思われる。その惨劇は一枚の絵でも数行の小説でも表現しきれないほど生々しく深刻だったからではないだろうか。

一九二六年にポーランドで生まれたアンジェイ・ワイダが最初に撮った劇映画は一九五四年の「世代」であった。そして一九五六年の「地下水道」と一九五八年の「灰とダイヤモンド」の初期三部作によつて世界的な映画監督として認められたのである。わが国でも一九六〇年の安保世代を中心に多くのファンがいる。しかし今の若

い世代は知らない人が多いと思われる。

ところで、私は今年の一月に初めてポーランドに行った。それは私の友人がアンジェイ・ワイダが作ったともいえるManggha美術館で個展を行うことになり、その手伝いに南部の古都クラクフに行ったのである。残念ながらその時にはアンジェイ・ワイダは三カ月前に亡くなっていて、そのときアンジェイ・ワイダ論を書くことを思いついたのである。

映画監督を映画作家をみなすならば、多くの作家がそうであるように、何を描くかよりもいかにうまく描くかに精神を集中するものである。初期のアンジェイ・ワイダも映画を撮り始めた時代であればあるほど、まず映画をうまくとることに熱中したに違いないのである。もちろん自分が理想とするような脚本に出会えれば一番いいのであるが、ある程度の脚本に出会えれば妥協して撮影に入ったかどうかとは想像できる。

処女作の映画を撮った時のアンジェイ・ワイダもそうした状況だったと思われる。「世代」をいま見て思うことはまずそういうことである。また社会主義リアリズムの影響がかすかに残存していることである。それは主人公のスタフが、レジスタンスの闘士として成長していくという物語として描いているあたりにそれが表れている。石炭泥棒していた青年が、対ドイツレジスタンスへと成長していく物語の描写にもそれがかいま見える。

しかし、他方では運動に参加することに慎重だったヤシオが激情に駆られてドイツ人将校を殺す場面や、ユダヤ人蜂起に関連してビルルの最上階に追い詰められて投身自殺するところには、ある種の英雄主義への批判が描かれていたといえる。

また、初めからイタリヤのネオ・リアリズムの影響もあって、外でのロケ中心の撮影スタイルが採用されてい

るところにも特徴がある。

さらに、原作が共産党系の人民軍の抵抗路線で描かれている関係から、それが映像にも反映していることは仕方がないことである。

ここで「世代」のあらずじを紹介しておこう。

ウルシャワの郊外の貧民窟に住むスタッフは友達二人とナイフ遊びをしている時、近くを通るドイツ軍の輸送列車を見つめる。三人は積み荷の石炭を盗むために列車に飛び乗るが、一人がドイツの警備員に見つかり射殺されてしまう。これがワイダの処女作の冒頭シーンである。タイトルバックはこの付近のバラック長屋の風景を俯瞰で撮影しているのが特徴である。

列車から飛び降りて逃げた防空壕にいた中年男に街の酒場に連れて行かれ、客で来ていた工員のセクワに紹介される。スタッフはこのセクワに紹介されて家具工場で働くことになる。この工場は国内軍の抵抗組織の武器庫としても使われていた。ある日その倉庫に行ったスタッフは一丁の拳銃を見つけそれを隠す。またセクワは仕事場でスタッフに資本主義の搾取の構造をわかりやすく講義したりする。

やがてカトリック系の学校に行くようになったスタッフは、下校中にひとりの娘に自分たちが作った青年組織に参加しないかと誘われる。その娘は集会に来た若者たちに、占領軍に復讐をするんだとビラをまいて演説をする。その話を工場でセクワに話すと、日曜日の朝に街に来るようにと言われる、二人でその娘をさがしだすとセクワはその娘をスタッフに紹介する。名前はドロータと言い、人民軍の一員であり、セクワも労働者党の党员であることがわかる。夜、ドロータのアパートに行ったスタッフは、そこで集会が行われていることを知る。またドロータ

がドイツ軍と戦って彼らの物資輸送を止めることが任務だと演説しているのを聞かされる。

街中に大勢のドイツ兵がいて、彼らによって処刑された人々が街角に吊るされており、市民も不安げに歩いている。そのなかに仕事仲間のヤシオがいる。工場に出たスタッフはヤシオに人民軍の活動に参加することを誘うが、父親が高齢で仕事を首になったから、自分が面倒をみなくてはならないので活動に参加できないと断る。

スタッフはドイツ軍の材木置き場に家具のための材木を買いに行くが、材木泥棒と間違えられてドイツ兵に殴られ嘲笑されて放り出されてしまう。その話を工場仲間にして、拳銃を見せると、皆で酒場に行くことになりドイツ兵が一人になったところで威嚇するが、そばにいた女給が騒ぎ出したため銃を持っていたヤシオがそのドイツ兵を射殺してしまう。その行為に興奮しているヤシオをスタッフが諫めるところが印象的である。ドロータにあつたスタッフがその話をするると自分の地区で無責任なことはするなと非難される、

セクワに会ったスタッフはユダヤ人ゲッターで蜂起が始まったことや、彼らを助けなければならないことを告げられる。ユダヤ人ゲッターでは建物が炎上しており、その周りにはドイツ兵が大勢いる。

若者五人でゲッターに行くことになったが、途中マンホールで生きのこったセクワを助ける。やがてドイツ兵と撃ち合いになり、一人とり残されたヤシオは高い建物の最上階に追い詰められ、踊り場に飛び降りて死ぬ。

拳銃の件で国内軍関係者に家宅捜査されたスタッフは近所の住民の協力で助けられたが、ドロータにあってヤシオが死んだことを聞かされ、ドロータのアパートに泊まる。翌朝食事を買いに出たスタッフが帰ると、下の住人からドロータの部屋にドイツ軍のゲシュタポが来ていることを聞かされ、彼らに連行されるドロータの後姿を見つめる。

煉瓦工場でドロータのことを思い出しているスタッフのところに、若い子供のような青年たちが六人やってくる。スタッフはドロータとの約束を思い出しつつ新しい仲間たちを見つめるのであった。

以上が「世代」のあらすじであるが、ソ連支配下にあった戦後ポーランドの新しい映画の誕生を象徴する画期的な作品であった。戦時下のポーランドの若者たちの新鮮な息吹が伝わってくる秀作である。のちに「水の中のナイフ」や「戦場のピアニスト」などを監督したポランスキも俳優として参加しているなど、ポーランドの若手の映画作家たちの結集した記念碑的な作品である。

「地下水道」(一九五六年)

脚本・イエジー・ステファン・スタヴィンスキ

ドイツ軍の爆撃で荒廃したワルシャワ市外、ワルシャワ蜂起が起こって二ヵ月、旧市街など市内はドイツ軍に包囲されて燃えている。そんな中蜂起した国内軍の中隊が市内を行軍していた。この中隊は三日前までは七〇名いた兵士もいまでは四三名に減っていた。中隊長のザドラ中尉をはじめ副官のモドリ中尉など、みな「赤い家」と呼ばれたブルジョアの邸宅に入っていく。

家に退却した中隊はそれぞれ一息つく。中隊長は前線に斥候を派遣するように命じ、副官はピアニストに何か演奏するように頼む。副官の愛人でもある女性は銃をもらう約束を迫り、小さな拳銃をもらう。ピアニストは自宅に電話したいと中隊長に頼み、やっと電話がつながるが、妻子と通話中にドイツ軍の侵入があり、途中で途切

れてしまう。

やがてドイツ軍の空爆も始まり、隊員たちはみな銃をもって外に飛び出してゆく。ドイツ軍の戦車が進行してきたのを見た隊員が砲撃を命中させると、そのあとから豆タンクがやってくる。それを見たひとりの隊員がスコップを持って飛び出し、タンクのうしろのリード線をスコップで切断するが、その時彼は右胸を撃たれてしまう。他の隊員が彼を助けて退却する。

やがて司令官から下水道を使って中央区に行くようにという指令がくだる。指令に反発する者も出るが、ドイツ軍が迫っているため指令に従うことになる。暗闇の中、迷路のように入り組んだ下水道を中隊長以下二七名の隊員は中央区目指して進んでいく。途中で旧市街から来た兵士が外に出ようとしてマンホールをのぼり、地上に出たとたんドイツ兵に銃撃されて下に落ちてくるのを数人の隊員が目撃する。

下水道には有毒ガスが発生しているとところもある。隊からはぐれた二人の隊員がむせ返ると咳が下水道内に反響して、その音に反応したドイツ兵がマンホールから手榴弾を投げ込んできたりする。中隊長は副官を探すようにと連絡係に命じるが、彼は暗闇の下水道が怖くて「先にいくようにと言われた」と嘘の報告をしてしまう。

副官たちと一緒にいたピアニストは発狂してオカリナを吹きながら一人で歩き去っていく。副官の愛人は彼が妻子持ちであることがわかり、絶望して彼からもらった小さな拳銃で自殺してしまう。

ヴィスワ川に通じる出口にやっとたどり着いた二人の隊員は、出口に鉄の柵がはまっていて川を見ながらもそこから出られないことに絶望する。副官はやっと見つけたマンホールから地上に出ると、ドイツ兵が待ち構えており、捕らえられた地下軍の兵士たちや山積みになった武器や死体の山も見える。

中隊長達三人も地上に出るマンホールを見つけて、手榴弾が三個しかけられていて、最後の一つを外す直前に爆発してしまふ。やっと外に出た中隊長が連絡係に残りの兵士を呼ぶように言うが、ついてきているというのは嘘だったと告白されて、怒ってその連絡係を射殺してしまふ。中隊長はまた一人で地下水道に戻っていくのである。

以上のあらすじを読んで、私がまず思い出すシーンはヴィスワ川の出口の鉄の柵の場面である。やっと川に脱出できると思ってきたのに、頑丈な鉄の柵があつて出れないことがわかる、絶望的なシーンである。ここで監督はそれ以上のことは語っていないけれど、この川の対岸に、すでにこの時ソ連軍が侵攻していたという話をどこかで読んだことがあり、このシーンを見るとなんとも複雑な心境にならざるを得ない。一説によると、この時ソ連はいずれポーランドを支配することを考慮して、それ以上の侵攻をやめたとも言われている。

また、吉本隆明は山本薩夫との対談で「地下水道」にふれて、「この映画には従来のレジスタンス映画の英雄主義に対するアンチテーゼがある」と言っている。これは深い洞察に満ちた言葉であると思われる。アンジェイ・ワイダもワルシヤワ蜂起の政治状況についてはあえて触れないまま、この映画を撮り終えているが、その言外の意味を吉本隆明は鋭く批評していると思われる。吉本隆明は生前、一度も欧米の地を訪問したことがない人だったけど、表現された作品の批評は的を得た、的確な批評だったのである。この映画の後半は暗い地下水道を延々とさ迷い歩くシーンが続くのであるが、この出口なしのモノクロのシーンに終始したところに、この映画の特徴があつたのである。

また、吉本隆明の対談を詳しく読むと、ソヴィエト的英雄主義に対するアンチテーゼという言い方もしているが、これはあきらかに社会主義リアリズムにつきものの、ヒーロー物語への批判を指摘していると思われる。

「灰とダイヤモンド」（一九五八年）

脚本・イエジー・アンジェイエフスキ

アンジェイ・ワイダ

第二次世界大戦が終結した一九四五年五月のはじめ、ポーランドの地方都市のとある教会の前で、二人の若者が一人の人物を待ち伏せしている。その人物とは県の労働党の書記である。見張りの男が口笛を吹くと、一台の車が教会に近づいてくる。二人の若者は銃を構えて、教会の前を通り過ぎようとする車を銃撃する。二人の男が乗った車はバランスを崩し一人は振り落とされる。止まった車に乗っていた男を射殺した二人は、振り落とされた男も追いかけて教会の前で射殺する。

二人の死体が並べられた教会に、新しく赴任した労働者党の書記と公安部隊の将校が到着する。新しい地区の書記は、二人は自分と誤認されて殺されたのであろうと言う。ひとりの工員がいつ平和になるのか、二人を殺したのは誰なのかと尋ねると、書記は「終戦はおわりではない。祖国のための闘い、明日への闘いはいま始まったばかりだ、我々はいつ殺されるかわからない」と言う。

夕刻になり街頭放送が「本日五月八日、ドイツ軍最高司令部はベルリンで無条件降伏に署名した」と告げる。

その放送を聞いた市民の中に、さきほどの殺人を犯した若者ふたりと見張り役だった男もいた。この見張り役は市長の秘書であり、その夜、終戦の祝いの宴会の準備もしなくてはならず、「もう人殺しは嫌だ、情報提供だけにしてくれ」と頼んでいる。

宴会の会場になっているホテルに来た若者のひとりマチエックは、バー・カウンターにいる給仕の娘に目を止める。もうひとりの若者は電話で国内軍の少佐に連絡をとる。ところがその連絡中に例の新書記がそのホテルにやってくる。それを見たマチエックは、自分たちが別の人物を誤って殺したことに気づき、電話中の仲間知らせる。マチエックはたばこの火をつけようとしている書記に火を貸してやり、その後、彼の隣の部屋に宿泊することにする。

国内軍の少佐は書記を殺害することを命令し、有能な共産主義者の書記を殺害すれば、政治宣伝で大きな反響があるはずだと考えている。書記は知り合いの家に行き、息子が愛国主義者に育てられていることを危惧している。ホテルでは終戦祝賀のパーティが始まっており、バーのカウンターにいる二人の若者はグラスに入れたウラツカに火をともし、蜂起で死んだ戦友たちを思いやる。

国内軍のゲリラ部隊長になったもうひとりの若者アンジェイは、マチエックに書記暗殺を念押しし、明朝この町を去ることを言い渡す。マチエックはバーの娘に仕事を途中で抜けて、夜自分の部屋に來ないかと誘う。彼が拳銃の手入れをしていると、娘がやってきて、地主の父親がドイツ軍に捕らえられ収容所で死亡し、母と二人でワルシャワに移住したが、母は蜂起で死亡したと語る。市長の秘書は泥酔しており、市長は彼を叱責し、祝賀会の演説を始める。

マチエックと娘が二階から降りてきてバーにいる書記を見つけ、マチエックは娘に別れを告げる。二階にもど

ろうとして階段ですれ違った書記に再びたばこの火を貸す。マチュエックはまた娘を誘い、三十分つきあってくれと言つて外に出る。二人は雨が降り始めたので廢墟となつた教会墓地の靈廟に入る。二人は墓碑を読み始める。

「松明ごと　なれの身より　火花の飛び散るとき　なれ知らずや　わが身をこがしつ　自由の身となれるを　持てる者はうしなわるべきさだめにあるを　残るはただ灰と　嵐のごと　深淵に落ち行く混迷のみなるを　永遠の勝利のあかつきに　灰のそこ深く　さんぜんたるダイヤモンドの残らんことを」

マチュエックは娘をダイヤモンドにたとえて、生き方を変えたいと言ひ、恋とは何か今まで知らずに来たと話す。マチュエックが足元のシートをめくると、今日自分たちが殺した二人の労働者の死体が横たわつていて、娘は悲鳴を上げる。

二人がホテルにもどつてきて、アンジェイに見つかったマチュエックは「人殺しはもう嫌だ、生きたい」と言うが、アンジェイは公私のはき違へは許さないと任務遂行を命じる。宴会場で泥酔した秘書が消火器を参加者に噴霧したうえ、テーブルクロスを引きはがす。彼は「出世はあきらめろ」と申し渡され、会場から追い出される。

ホテルの部屋にいる書記のところに公安部隊の少尉がたずねてきて、書記の息子が国内軍部隊の一員になつていて、現在取り調べ中だと報告する。少尉はこれから迎えの車をよこすから待つてくれと告げ部屋を出ていく。ホテルのフロントで車を回してくれと頼んでいるのを聞いたマチュエックは、物陰に身を潜めて書記を待つ。二階から降りてきた書記は車が来ないことにしびれをきらして、ひとり歩いて行くとホテルをでていく。マチュエック

クは書記の後をつけ、人気のない場所で射殺する。

部屋に戻ったマチュエックは出発の準備をする。昨晚のマチュエックの言葉に期待をかけていた娘は失望する。

市の仕事を失った秘書はマチュエックを見つけ、すがるように彼の名前を呼んで追いかけてくる。彼の呼びかけを無視して走り去るマチュエックは曲がり角に差し掛かったところで保安隊のパトロールに見つかり、逃げ出した彼は背中を撃たれてしまう。マチュエックはひとりゴミ捨て場まで逃げてくるがやがて苦痛にのたうちながら死んでゆく。

私がこの映画を最初に見たとき、この作品の意図などは全く理解できなかったと思う。戦争が終わったのにまだその続きみたいなのをしている変な映画だ、くらいにしか思っただけだったと思う。いまでも監督の意図するところを正確に理解してみる人はそんなに多くはないと思う。

先の吉本隆明の「地下水道」論では「小国のみじめさ」をいう言葉があった。私がこの映画を見て、戦争が終わってもまだ戦いが続くといったのは、ポーランドという国がドイツとロシアという大国に挟まれた小国だったからであると思われる。つまりドイツの占領から解放されても、今度はまたソ連の支配がやってきたからである。ここにポーランドという国の複雑性があったのである。私のような大学生が一度見ただけでは理解できないはずである。

「灰とダイヤモンド」のもう一つのテーマは、政治的イデオロギーと家族的な愛との逆立の構造であろう。政治的な権力闘争のまっただ中にいた青年が、一人の女性を愛したために一人の人間としていきたいと思った時に、

その政治闘争から抜け出せずに、最後はみじめな死を迎えるという悲劇的なドラマなのである。

ところで、以前沖繩文学の調査をしていた時一九六〇年前後に「琉大文学」にかかわっていた詩人たちに、このアンジエイ・ワイダのファンが幾人もいたのである。今考えると東京の学生と沖繩の学生では同じ映画を見ても見方が違うことがありうる。沖繩がアメリカ軍と我が国で唯一の地上戦を戦った時、本国からの援軍もなく多大の犠牲のもとで占領されたのであった。しかも敗戦後もアメリカ軍の支配下にあつて土地までも接収されたのである。これはドイツ軍とたたかっただけ後も、ソ連と戦わざるを得なかつたポーランドとよくにっていたのであった。

「鷺の指輪」(一九九二年)

原作・アレクサンデル・シチボル・リルスキ

脚本・アンジエイ・ワイダ

マチエイ・カルピンスキ

アンジエイ・コトコフスキ

一九四四年八月一日ポーランドの対ドイツレジスタンス組織・国内軍(ak)は、ワルシャワ市内で一斉蜂起した。国内軍兵士のマルチンは大尉から小隊長に任命される。国内軍は多くの市民を巻き込んで、六十三日間の凄惨で絶望的な戦いを展開する。その後共産主義を信奉するレジスタンス組織・人民軍(al)も蜂起参加するが、ヴィスワ川まで来ていたソ連軍は、蜂起を支援することなくワルシャワ蜂起は二ヶ月足らずで鎮圧されてしまう。

マルチンの小隊も敗走して負傷したマルチンは、ともに戦った恋人ヴィシカとともに武器を捨て、軍服も脱いで、市民に紛れて退避する。その時ヴィシカは王冠のついた鷲の指輪をマルチンに渡す。しかし当時ドイツ軍の手先だったウクライナ兵にヴィシカが連れ去られる。

病院に収容されているマルチンを国内軍の少佐が探し出し、対ソ連地下組織「ニエ」機関に参加するように説得する。最初は躊躇したマルチンもその命令を受け入れ、国内軍の看護婦だったヤニーナに助けられて病院をぬけ出す。

マルチンがかつての部下を探し出し、いまは「ソ連と戦うか、なにもしないで腐るか、赤の仮面をかぶるか」のいずれでしかないと話し、彼自身は赤の仮面をかぶることにする。そして、かつて人民軍の兵士だったタタルのいる労働者党地区本部を訪ね、タタルの運転手として共産側との接触に成功する。そこでマルチンは元ポーランド国家保安局（秘密警察）の士官だったコシヨールと知り合う。

ある日、コシヨールはマルチンに車を運転させて駅に向かう。そこでソ連に投降した国内軍兵士がひざまずかされて貨車に乗せられ、シベリア送りになる光景をみる。その時同志たちが歌う「聖母マリア」を聞いてマルチンも涙する。またコシヨールはマルチンの指輪を見つけ、旧ポーランドを象徴する王冠をけずりとってしまふ。

コシヨールは国内軍の中からブラヴジッチという大物を連れ出し、対ソ連の「ニエ」機関を壊滅することをめざしていたのである。ヤルタ協定の結果ポーランドはソ連の支配下に入ることを伝え、共産側との話し合いを勧める。この橋渡しにマルチンが選ばれるが、これは国内軍の大物ブラヴジッチとシタネルとをおびき出して捕まえる、ソ連とポーランド秘密警察との罠であることがわかる。マルチンはニエ機関のアジトで恋人のヴィシカと

再会するが、彼女はマルチンが返そうとした指輪を投げ捨ててしまう。

ブラヴジッチたちはモスクワに拉致され、他の同志たちも逮捕される。すべて自分がかかわったソ連の罠だったことを知ったマルチンは、隠しておいたピストルで自殺する。

この作品は「灰とダイヤモンド」の続編として制作されたものである。二つの作品には三十四年間の時間があるが、そこに、監督の戦後直後の歴史ドラマへの強い関心があったことがわかる。主人公マルチンは「灰とダイヤモンド」のマチエックの分身として描かれている。アンジェイ・ワイダが描きかけたのは、ドイツ軍の占領から解放されたポーランドの戦後の政治的思想的状况のドラマを、ソ連の指導下にある共産党政権と、旧国内軍との思想闘争として描きかけたのである。主人公マルチンは赤の仮面をかぶることによって国内軍の復活をもとめて活動するが、結果としてソ連側の戦略が一枚上であり、うまく利用されて壊滅的な打撃を受けて敗れることになる。また両作品とも、主人公は恋人との恋愛に敗れてしまうところも共通して描かれている。そこにアンジェイ・ワイダのロマンティシズムが表れている。

「カティンの森」(二〇〇七年)

原作・アンジェイ・ムラルチク

脚本・アンジェイ・ワイダ

ヴワウスワフ・パシコフスキ

プシュムイスワフ・ノヴァコフスキ

一九三九年九月一七日ドイツ軍によって西から追われた人々と、ソ連軍によって東から追われた人々がポーランド東部ブフ川の橋の上で交錯していた。どちらに逃げればいいのか戸惑う人々の中に、南部のクラクフから夫のアンジェイ大尉を探しに来たアンナと娘ニカは大将夫人のルジャに会う。

この間アンジェイや友人のイエジなどポーランド将校たちは、ソ連軍の捕虜になっており、事実、妻と娘の目の前で軍用列車に乗せられて東部へと運ばれていたのである。

また、一九三九年一月クラクフのヤギエロン大学では、アンジェイの父ヤンをはじめとする教授たちもドイツ軍に召集され、ザクセンハウゼン収容所に送られていた。

一九三九年のクリスマス・イブのあとに残された家族も庭で一番星を待っており、同じ時刻ソ連領内のコジェルスク収容所に閉じ込められている将校たちも一番星が出るのを待っており、将来のポーランドの再建を祈って全員で讚美歌をうたったのである。

一九四〇年の春アンナとニカはクラクフの義母のもとにもどると、義父のヤン教授の死亡の報告が届く。しかしアンジェイの無事を祈る母と妻と娘の三人の女性たちは、その帰りを待ちつづける。同じ頃コジェルスク収容所のアンジェイは発熱し、友人のイエジからセーターを貸してもらう。それを着たままアンジェイは他の将校たちとともに別の収容所に移送される。友人のイエジはそこに残されたままである。

一九四三年四月ドイツは一時的に占領したソ連領のカティンで虐殺された多数のポーランド将校の遺体を発見したと報道した。新聞に載った犠牲者名簿には大将とイエジの名前はあったがアンジェイの名前はなかった。

一九四五年一月クラクフがドイツから解放され、イエジはソ連が編成したポーランド軍の将校になっていた。

イエジはクラクフにアンナを訪ね、カティン・リストの間違いを伝え、夫の死亡を知ったアンナは気を失う。またイエジは大將夫人にも会い、ソ連の語るカティンのウソを知り、苦悩の末ピストル自殺をする。戦争は終わったが、ポーランドはソ連の支配下に置かれ、カティンのことは語る事がタブーとなった。

二〇世紀は戦争と革命の時代と言われる、その代表はドイツとソ連であろう。そしてそれらの強国に挟まれた国こそポーランドであった。だから二〇世紀のポーランドはまさにその歴史ドラマの舞台そのものだった。そこで七〇年近く映画を撮り続けた人がアンジェイワイダであった。

「カティンの森」の冒頭シーンは象徴的である。「一九三九年九月一七日ドイツ軍によって西側から追われた人々と、ソ連軍によって東側から追われた人々が東部フク川の橋の上で交錯していた。」

なんとポーランドは同時期にドイツとソ連から侵略されていたのである。そしてこの時ソ連の捕虜となった二万二〇〇〇人が半年後にソ連の秘密警察によって銃殺されたと言われている。一九四〇年三月五日付けの秘密警察長官ベリヤのスターリン宛「ポーランド将校銃殺刑定義書」と、それを承認したソ連共産党政治局の命令によって銃殺刑が行われたのである。この秘密文書は一九九二年ロシアのエリツィン大統領から、当時のポーランド大統領ワレサに明かされて、初めてソ連最高指導部による国家犯罪としてあきらかになったのである。

ワイダ監督の父親もこの時の犠牲者のひとりだったのである。そして監督の執念の作品が完成するまでに六七年の歳月がかかったことも、ポーランドという国の複雑な政治状況を物語っている。

それにしてもポーランド将校がひとりずつ狭い部屋で頭を短銃で撃たれて殺されていくシーンは、リアルに描

写されていて、血生臭い匂いが伝わってきそうであった。この場面を監督として演出しなければならなかった監督の想いを想像すると言葉を失う。

「大理石の男」

脚本・アレクサンデル・シチボル・リルスキ

一九七六年映画大学の女子学生アグネシカは、テレビ局で彼女の初めてのドキュメンタリー作品を制作することになった。彼女が選んだテーマは、一九五〇年代に労働英雄として有名になった男の物語であった。テレビ局では制作に必要な機材を彼女に提供してくれることになった。彼女はまず主人公の調査のために博物館に行き、倉庫の一隅に放置された大理石の彫像を発見した。それはかつて有名だった煉瓦積み工のマテウシ・ビルクートの像であった。彼はポーランドで戦後最初の大工業プロジェクトの建設に従事した労働者だった。

アグネシカは最初高名な映画監督ブルスキに会う。彼は統一労働者党の書記ヨドワと一緒に組織したデモンストレーションで、ビルクートが煉瓦積みの新記録を達成した時の映画監督だったのである。マスコミは一斉にビルクートの輝かしい記録にとびつき、彼を見習うようにとの宣伝が行われた。これによってブルスキも新しい映画監督のキャリアを手にしたのである。

つぎに、アグネシカが接触したのは、もと保安隊の要員でビルクートの経歴に詳しいミハラクという男だった。彼によると、ある日ビルクートが班長として煉瓦積みデモンストレーションに参加した時、誰かが作業中のビ

ルクトに熱く焼けたレンガを渡すという事件が発生し、同僚のビテックが犯人として疑われ、ビルクトがかばったにもかかわらず、ビテックは逮捕されてしまう。彼の弁護に当たったビルクトは住宅も取り上げられ、職も名誉も失ってしまう。結局二人とも刑務所おくりになる。

アグネシカの映画製作について、テレビ局から機材を引き上げるといふ話が出てくるようになった。そのころビデックから出獄したビルクトが、入獄中に別れた元妻を探しているといふ話をしてきた。元妻はザコバネにいらしいという。ザコバネでアグネシカもかれの元妻に会い、彼女の苦難な生活や別れた夫との再会についての悲劇的な話などを聞く。しかしビルクトとその息子を探し出すことはできなかった。テレビ局の編成係は彼女の企画を没にしてしまった。

がっかりしたアグネシカは父親に会う。そして彼から平凡な真実こそ何よりも大切だということや、映画そのものよりも真実を追求したことが大事だと言われる。

アグネシカはビルクトの息子が、グダニスクの造船所で働いていることを突き止め、彼に会う。しかし息子は父がすでに死んでこの世にいないこと、またそれ以上のことを語ろうとしない。しかしあきらめきれない彼女は彼の退社時に待ち伏せし、当初の目的を達成するために、彼を連れてワルシャワのテレビ局に行こうと思うのだった。

まず、この映画のスタイルが特徴的である。つまり、一九五〇年代の労働英雄のドキュメンタリーを、現代の女子学生が映画化するという発想が面白い。

一種の「作中劇」のスタイルを使って、一九五〇年代の「社会主義リアリズム」を批判することが目的だったと思われる。その目論みは巧みな方法論によって見事に達成されたといえる。

一人の労働英雄の光と影を考察することによって、人間的な真実とその優れた芸術的表現が志向されている。映画という大衆イメージの映像作品を使って、アンジェイ・ワイダの鋭い批評精神が発揮されているという意味で、成熟した映画作りがなされている、と言えるだろう。カンヌ国際映画祭国際批評家連盟賞を受賞したのもうなずける。

「鉄の男」（一九八一年）

脚本・アレキサンデル・シチボル・リルスキ

一九八〇年八月ワルシャワ放送局のレポーター、ヴィンケルは、テレビ・ラジオ委員会副会長の指示で労働者の大規模なストライキが行われているグダニスクに派遣された。

グダニスクの県労働党のパデッキは、ストライキを指導するマチェックに関するVTRをヴィンケルに見せ、ストライキを抑圧するために邪魔なマチェックを失墜させる必要があると語り、ヴィンケルを造船所に潜入させる。ヴィンケルはテレビ局時代に飲酒運転で人身事故を起こしたという前歴があるため、その負い目からこの任務を断れなかったのである。

グダニスクについたヴィンケルは公安警察のヴィルスキーに会い、マチェックの周辺の資料をもらおうとともに、

マチェックの妻のアグネシカに会うようにと言われる。アグネシカはかつてマチェックの父で労働英雄だったビルクートのドキュメンタリーを撮った時に、テレビ局でヴィンケルと顔なじみであったが、彼女は今はストライキに参加した労働者を支援したため拘留されていた。

グダニスク造船所に出かけたヴィンケルは門の前で白木の十字架が運ばれてくるのを見た。それは十年前の一九七〇年一月二日に起こった労働者のデモの際に門の前で殺された労働者の慰霊碑であった。また、その壇上で市民に向かって演説するマチェックを発見するのだった。

その時ヴィンケルに声をかけてきたのが、グダニスクの放送局で会ったことのあるジデクだった。大学時代にマチェックと友人であり、今は技術スタッフとして働いていた。ジデクはヴィンケルを局内の映写室に案内し、公開禁止の一九七〇年一月二月の街頭デモを撮ったフィルムをヴィンケルに見せ、彼が知るマチェックについて語りだした。

一九六八年三月の学生蜂起の際、労働者が動くうとしなかったためマチェックは父親のビルクートを激しくなじる。すると逆に父親は息子をデモに行かせないために彼を部屋に閉じ込めてしまう。

また、二年後の一九七〇年の時は今度は労働者が立ち上がったデモに学生たちが反応せず、マチェックも部屋から出ようとしなかった。そしてその騒乱の中でビルクートは殺されてしまったのである。マチェックが現場に着いた時には権力側によって遺体がすでに持ち去られていた。やがてマチェックは大学を辞め、造船所の技師となって、父を理解しようと決心するのだった。

また、ヴィンケルはビルクートの同志だったフレヴィチ夫人に会い、ビルクートが死んだ当時の事情を聞くこ

とができた。マチエックは父親の遺体を死体安置所で見つけ、橋の上の道端に父が死んだ現場を見定めると、そこを墓場と決め鉄のパイプで作った十字架を立てた。

また、ヴェンケルは造船所内のマチエクの行動がわかってくる。マチエクは二つの都市で起こったストライキに際し、単独で抗議行動を行い造船所の労働者にも団結するように運動したが、労働者は彼の行動を黙殺したのである。この一九七六年の運動が、のちのグダニスクの八〇年の夏の「連帯」へとつながっていくのである。

ヴェンケルは拘留所にアグネシカを訪ね、彼女が撮ったビクトールの映画を撮りながらその死を知らなかった。それで造船所の溶接工だったマチエクに、自分が撮ったフィルムをワルシャワで見せようとするが、局はフィルムを渡そうとしなかった。マチエクは映画がだめなら写真で行こうと提案する。しかしこの写真展示の計画も当局にとってつぶされてしまう。

やがて結婚した二人は電車内でピラを配ったり、街をゴミで汚した罪で逮捕されたり、スーパーでアルバイトしたりした。

マチエクはそれからも活動を続け逮捕され釈放され、また逮捕されるなど、子供が生まれた時も監獄にいたのである。

造船所の大会議室では、政労合意によるストライキ中止の協定調印が行われようとしていた。マチエクと労働者のつめかけた会場の中には、自主管理労組「連帯」の委員長レフ・ワレサの姿も見えた。拘留所から釈放されたアグネシカも会場に来てマチエクを見つけ二人は喜びを分かち合った。調印を締めくくるヤギエルスキ副首相のあいさつが終わり、静まり返った会場に拍手が起こり国歌が流れた。

マチエクはかつて父ビルクートの墓と定めた橋の上に立つてつぶやいた。「一緒によるこんでくれるだろうね」鉄パイプの十字架が立っていた後に、マチエクは調印が成立したことを告げる報告書をそなえた。やがてそこを離れたマチエクは待っていたアグネシカとともに力強く歩き始めるのだった。

この映画は好評だった「大理石の男」の続編として作られている。しかも一九七〇年代から一九八〇年代のポーランドの激動の歴史ドキュメンタリーとして構想されていた。その歴史ドラマを当時の労働者親子の物語として描き、その語り手を若い女性の映画作家と、中年のテレビリポーターを選んだところが面白い演出であった。

最後に、自主管理労組連帯のワレサの映像を挿入することで、この作品を締めくくっているところなどは憎い演出の鮮やかさを見せている。この作品も一九八一年のカンヌ国際映画祭パルム・ドールを受賞している。

「悪霊」（一九八八年）

原作・ドストエフスキ

脚本・ジャン・IIクロード・カリエール

アンジェイ・ワイタ

アグネシカ・ホランド

エドワード・セヴロウスキ

一八七〇年頃のロシアのある地方の町で、若い過激派のグループの数人がスイスからロシアに帰って来る。この若者たちはいずれもこの町のステパン教授の教え子たちであった。

特に教授の息子だったピエールは、その組織の中心メンバーで、旧体制社会を変革する政治結社を組織しようとしていた。ピエールは自分たちの政治結社に思想を注入する人物として、町の富裕な陸軍中将夫人の一人息子スタヴローギンを考えており、それを仲間たちに信じ込ませようとしていた。

仲間の一人シャートフもステパン教授の教え子であったが、彼は組織から離れる決心をしていた。しかし彼は組織の重要な財産である印刷機の管理をまかされており、それを一人で、ある場所に埋めていたのである。映画はこのシャートフが一人で印刷機を埋めるシーンから始まっていた。

影の中心人物であるスタヴローギンが町に帰ってくるると同時に、若者たちは活動を開始し、集会を組織するとともに、労働者を煽動したりした。その結果ピエールに煽動された労働者たちが蜂起した。その中に仲間のシャートフもいた。しかし長い間服従していた労働者は知事の一括に恐れをなし服従してしまふのであった。

首謀者への罰として知事はシャートフを含む数人の労働者にむち打ちの刑を科した。すでに知事夫人の懐柔に成功していたピエールは知事にシャートフの釈放を要請した。それによってピエールはシャートフを労働者として売った密告者として、組織の仲間信じ込ませることに成功した。またピエールはスタヴローギンの崇拜者のひとりであり、自殺志願者のキリーロフに接近し、彼をシャートフの殺害の犯人に仕立て上げようと企てていた。

そのころ、ヨーロッパからシャートフの妻マリアがロシアに帰国した。彼女はスタヴローギンの子供を身ごもっていたが、妻を愛するシャートフは彼女を温かく迎え入れた。そして親子三人新しく生活を立て直し、幸せな暮

らしを夢見ていた。

やがて、無事赤ん坊が生まれて喜んでいるシャートフのもとに組織の仲間がピエールの使いでやってきて、印刷機のありかを教えれば、シャートフを自由にすると言う。シャートフは仲間とともに雪の日に出かけて行き、林の中で殺されてしまう。

シャートフを殺したピエールはキリーロフのところに行き、彼に自分が裏切者のシャートフを殺したという手紙を書かせた。その後キリーロフは銃で自殺した。

組織の一人が放火したため町は炎につつまれていて、人々が逃げ惑うなか田舎に引きこもりたいと思っていたステパン教授は小舟の上で静かに息をひきとった。

アンジェイ・ワイダはこれまでロシアの小説家ドストエフスキーの作品を二つ映画化している。一つはここに紹介している「悪霊」であり、もう一本は「白痴」の舞台劇の映像化したものである。アンジェイ・ワイダがドストエフスキーに関心を寄せるのは、私の意見ではドストエフスキーが若い日に空想的社会主義者の運動にかわり、その後思想的に転向して小説家になったという経歴を持っていたからだと思われる。なぜならアンジェイ・ワイダの大きなテーマが政治と文学（芸術）の問題があったからである。事実ドストエフスキーの文学は革命後のソ連、それも特にスターリン時代のソ連ではほとんど注目されなかったからである。彼の文学が注目され出したのはスターリン主義の批判が支配的になってからのことだったのである。他方アンジェイ・ワイダの映画もポーランドがスターリン主義の体制下では検閲が厳しく自由に映画を作れなかったからである。

ドストエフスキーはこの小説をネチャーエフ事件という若者たちの政治グループでの殺人事件にヒントを得て書いたのである。しかしアンジェイ・ワイダがそれを映画化するとき、その主人公をなんと殺されるシャートフという若者に焦点を当てて、この映画を撮ろうとしているのである。すでにこの構想を監督が懐いたところに作者の権力と暴力に抑圧される人間ドラマを志向し、批判していることが読みとれるのである。しかも監督が殺されるシャートフがその直前に、妻子との幸せな家庭をイメージしている状況を設定しているところが重要である。ここでも政治と家族が逆立するという構造が浮上してくるのである。

この映画の見どころについてアンジェイ・ワイダは次のように語っている。

「ドストエフスキーは一九世紀における最も優れた作家であり、将来のビジョンを見通して、二〇世紀を予言しました。数百年にわたる大量の政治的犯罪、テロ行為そして暴力！

あなたがたが、こうした過程はどこで、どのようにして始まるのかを知りたいならば、ドストエフスキーの「悪霊」を映画化した私の作品をごらんください。」（悪霊・パンフレット）

戦争と革命の犯罪と暴力を体験してきた作者らしいことばである。

【ナスターシャ】（一九九四年）

原作・ドストエフスキー「白痴」より

脚本・アンジェイ・ワイダ

マチエイ・カルピンスキイ

この映画はもともと劇場で舞台として公演されたものをもとに映画化したものである。その脚本が変わっている、ドストエフスキーの小説「白痴」をもとにしながらも、舞台は小説の最後の場面だけで演じられている。しかも演技者は坂東玉三郎と永島敏行の二人だけ。つまり玉三郎がムイシュキン公爵とナスターシャの一人二役を演じている。全編がポーランドの首都ワルシャワの宮殿でロケ撮影されている。

ドストエフスキーはかつてバルザックを愛読したというだけあって、この優れた恋愛小説をいかに終結させるかに苦心したに違いない。結局、暴力的なラゴージンにナスターシャを殺させることで結末をつけようとしたのである。最後の場面はそのナスターシャが殺されている部屋で二人の男が語り合うというシーンである。この場面だけでも「白痴」は傑作と言われている。それほど鬼気迫る場面を玉三郎は見事に一人二役で演じているのである。

かつて吉本隆明はドストエフスキーについての講演のなかでこの「白痴」にふれ、ムイシュキン公爵が二人の女性ナスターシャとアグライヤに魅かれながら、どちらか一人を選べないのは彼の内面の幼児性にあつて、エロ的な対象に対して選択性を選ぶことができないのだと言ったことがあった。（『ドストエフスキーのアジア』『超西欧的まで』）

この批評をふまえてアンジェイ・ワイダの映画を見直すと、今度はナスターシャが二人の男性の一人を選べなくて、葛藤する状況にあったことに注目していることがわかる。事実この映画の冒頭シーンはナスターシャとムイシュキン公爵が結婚式を挙げようとする場面で、彼女が聴衆の中にいるラゴージンを見つけ、彼のもとへ逃げ去っていくという場面だからである。アンジェイ・ワイダは映画の冒頭シーンで、その映画のテーマを端的に語

るところがある。

また彼の部屋にある父親の肖像画を見たナスターシャとマイシユキン公爵のふたりの反応にふれて、

「じつに不思議だね、あんたたち二人は何から何まで同じだったってことは」

とラゴージンに言わせている。監督が玉三郎に二役をさせたのもその状況を読んでのことだったと思われる。

「残像」(二〇一六年)

脚本・アンジェイ・ワイダ

アンジェイ・ムラルチュク

なだらかな草原が広がる丘の斜面を、ウツチ造形大学の教授ストウシユミンスキが先陣を切って笑いながら転がり降りると、続いて学生たちが一斉にごろごろと回転しながら降りてくる。牧歌的な景観の中で教授は学生たちに自らの芸術理論を語る。

時代は一九四九年から一九五二年のスターリン主義時代のポーランド、舞台は中部の都市ウツチ。ストウシユミンスキは画家でウツチ造形大学の教授である。彼は二〇世紀ポーランドを代表する芸術家のひとりであり、特に第二次世界大戦前の国際的な前衛芸術運動の中で大きな役割をはたし、国内でも若手の芸術家をリードする重要な画家であった。彼を慕う学生たちは彼を「近代絵画の救世主」と崇めていた。

だが、政府の意向に従わざるを得ないのは大学も同じである。そして文化省は芸術は政治の理念を反映するも

のだという理念を芸術家や学生たちに強制してくる。この締め付けは次第に芸術家のひいては人間の尊厳をも奪うものとなっていった。社会主義リアリズムの原則の下、党の任務を遂行するために働いている忠実な党員や芸術家たちと異なり、ストウシュミンスキは己の芸術に妥協しない。彼は作品に政治を持ち込むことを拒み、党規則に反する独自の芸術の道をあゆみはじめる。こうした姿勢によりストウシュミンスキは迫害され、大学とポーランド造形美術家協会から追放される。

社会主義権力は彼を国家に追従させるか、従わないのであれば破滅させるべく追い込んでいく。美術館、ギャラリーに飾られた作品は破棄され、学生たちと開催しようとした展覧会は跡形もなく破壊されてしまう。そんななか元妻でポーランドを代表する彫刻家だったカタジナ・コブカが病死する。葬儀に臨んだのは父親に複雑な愛情をいだく娘のニカだけだった。

食料配給も受けられず、画材も入手できず、生活はどん底まで落ちていく。病気も進行し日々衰弱していく。大学関係者も見放すが、詩人や学生などは彼を尊敬し支える。彼らは国家の制裁を恐れず教授のもとへ通い続けた。

しかし、ストウミンスキはいよいよ困窮する。学生たちの助力で市役所に雇われるが、それは政治的プロパガンダを描く仕事だった。そこにも当局の力がおよび絵筆を握ることも許されず、ショーウィンドーのマネキンの飾りつけをさせられる。しかし弱り切った彼はショーウィンドーの中で倒れこむ。しかし通行人は気づくことなく行き過ぎていく。

この作品がアンジェイ・ワイダの遺作になった。この作品を岩波ホールで見終わったとき、「アンジェイ・ワイダは最後の最後までアンジェイ・ワイダだったな」というのがわたしの率直な感想であり、しばらく立てないほど感動したことを覚えている。

アンジェイ・ワイダはこの作品のモチーフについて次のように語っていた。

「私は人々の生活のあらゆる面を支配しようと目論む全体主義国家と一人の権威ある人間との闘いを描きたかったのです。一人の人間がどのように国家機構に抵抗するのか。表現の自由を得るためにどれだけの対価を払わなければならないのか。全体主義国家で個人はどのような選択を迫られるのか。これらは過去の問題と思われていましたが、今もゆっくりと私たちを苦しめ始めています。どのような答えを出すべきか、私たちはすでに知っている。そのことをわすれてはならないのです。」（残像・パンフレット）

かつてハンナ・アーレントは「全体主義の起源」によって、ドイツのナチズムを批判した返す刀で同時にソヴィエト・スターリニズムをも批判したと言われている。この引用文はアンジェイ・ワイダが同様の思想の持主であったことを物語っているが、アンジェイ・ワイダの場合はもう一つ後者の芸術理論だった「社会主義リアリズム」との格闘もあつたことを思うと、その思想的想像力は政治と文化を包括する幅広いものであつたことがわかる。

付記

この研究ノートはアンジェイ・ワイダの映画作品を知ってもらうことが先決だと思つたので、映画のあらすじの紹介が中心になつてしまつた。しかし、それでひとりでも多くの人がアンジェイ・ワイダの映画と彼を生み出したポーランドという国に関心を持つ

「アンジェイ・ワイダ」ノート

てもらえたら、このノートの意義はあつたことになる。大学図書館でアンジェイ・ワイダの映画のDVDがみられることを願っている。